

# 第7回世界遺産学習全国サミット in 平泉 参加概要報告

大和郡山市立郡山西小学校 教諭 島俊彦

1月5日（土）、岩手県平泉町立平泉小学校で開催された、第7回世界遺産学習全国サミット in ひらいずみに参加した。午前中は4つのテーマで分科会が行われ、午後からは児童生徒の実践発表や、千葉科学大学学長木曾功氏の記念講演が行われた。以下報告を行う。

## 「テーマ別分科会」

ESDをテーマとした分科会に参加した。ここでは、2校の実践発表が行われた。

1校目は、宮城県気仙沼市の山間部に位置する、気仙沼市立馬籠小学校である。全校児童29名、完全複式3学級の小規模校だ。来年には統廃合を控えている。馬籠小学校は歴史を切り口に、馬籠風土研究会と連携した地域学習を行っている。2校目は、福島県奥会津に位置する只見町立朝日小学校である。ブナの原生林など、豊かな自然を有し、環境を切り口とした地域学習を行っている。



分科会の様子

両校の実践発表から、地域学習を推進してい

く上で大切なことを2つ学んだ。1つ目は「地域資源の有効活用」、2つ目は「教師の役割」である。

1つ目の「地域資源の有効活用」とは、地域資源を学校教育に、どう生かしていくかである。地域資源は教育資源である。地域が有する「人・もの・こと」を、各校のカリキュラムに生かすことができれば、子どもの学習経験をより豊かに組織することができる。両校は地域資源を、上手くカリキュラムに位置づけていた。地域資源の有効活用のためには、勤務校での地域フィールドワークなどを行い、カリキュラム編成の主体である我々教員が、まずは地域を知ることが重要だと感じた。

2つ目の「教員の役割」とは、子どもの学習をコーディネートすることである。指導助言者の及川幸彦氏が、コーディネーターの3機能として、教員の役割を教えてくれた。3機能とは、インストラクター、トランスレーター、ファシリテーターである。インストラクターとは、教授する役割である。概念的知識の獲得を児童に促す上で、具体的な知識や用語などは、しっかりと教え授けなければならない。トランスレーターとは、翻訳する役割である。地域に根ざした学習を進めていくと、必然的に学校外部の方との交流が増える。また、その方々がゲストティーチャーとして、授業に参加していただく機会も増える。ゲストティーチャー任せに授業を進めると、子どもにとって話が難解すぎるため、折角の話も届かない。ゲストティーチャーは、教育の専門家ではない。教員が児童に届く言葉に翻訳しながら、ゲストティーチャーと協働して授業を展開していくことが重要である。ファシリテーターとは、子どもの学びを促進する役割である。我々教員は、学習の主体者である子どもが、ストーリーを持った学びを展開できる学習計画を、組織する必要がある。地域を舞台に、空間や時空を越えた学び、多様な考え方を引き出せる学びを組織していくことが、子どもの学びに火をつける。児童の探求的な学びを促すためにも、促進者としての役割を大切にしたい。

午前中の分科会では、地域学習とESDのつながりについて学ぶことができた。また、地域に親しむ（体験や遊び）、知る（知識理解）、活かす（資質能力の向上）、守る（伝統文化の継承）という、地域学習における4つの段階があることも、学ぶことができた。両校の実践発表に学んだことを、自身の実践に生かしていきたい。

## 「記念講演」

講師の木曾氏は、これからの教育の根幹は「世界的に通用する技能」と、「世界的に通用する倫理観」の育成であるとした上で、その2つの育成に資するものこそ、ESDであると主張された。

木曾氏の主張に共感すると同時に、疑問も生じた。世界的に通用する技能と倫理観が、一体何を指すのかということである。グローバル化する社会に貢献できる人材の育成に求められる技能と倫理観を、実践者である我々教員が具体的に考えなければ、実践自体が漠然としたものになる。子ども達にどんな力を身につけさせたいのか。ゴールイメージを常に思い描いて、実践を積み重ねることが重要であると考えた。

また、木曾氏は問題発見力が重要であるとも主張した。私も同意見である。身近な地域や社会全体の持続不可能性に、気づく力が問題発見力である。問題を発見すると「なぜだろう？」「どうなっているのだろう？」と問いが生じる。原因が知りたいと探求心に火がつくことで行動化が起きる。問題発見と探求はセットである。問いを連続させ、探求し続ける力や学び方を身につけさせることが、これからの教育では重要であろう。そのためには、子どもと教師が学ぶ必然性のある、学びのストーリーのある学習展開を組織する必要があることを学んだ。